
ONE LIFE

raki & 竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE LIFE

【ZINE】

Z0451S

【作者名】

r a k i & 竜司

【あらすじ】

作者 : r a k i

病院を抜け出し、かつて暮らした故郷を目指す兄妹。

余命僅か、治療の継続が必要な妹は生まれた地を訪れる」とを望む。兄はすべてを失つてもその望みを叶える。

その正義は独善か、その罪は本当の悪なのか。

兄妹は眞の幸福を得ることができるのだろうか。

（前書き）

このたび東北地方太平洋沖地震により、被災されたみなさまには心よりお見舞い申し上げます。

この掌編には今回の地震に関しての描写があります。使い方が良くないかなとは思いましたが、書いた時期がはつきりわかるような作品に仕上げたいという願望があつたので、そのような描写を使用しました。

僕が個人的に思い入れがある『the pillows』の楽曲『ONELIFE』を聴いて、これを書きました。

『the pillows』のメッセージを少しでも再現できていたらいいなと思います。

善と悪、本物と偽物、そんなテーマです。

読者様に少しでもそういうことを考えていただける作品になつていれば幸いです。

揺れる車両の真ん中の席で、俺と妹は窓の外を眺めていた。

東京から、群馬の田舎に向かつて東武線を使ってゆつくりと下る。東北で起きた日本観測史上最大の大地震の影響で特急は運行停止だつた。

群馬に入ると、しばらく同じ様な景観となる。のどかな田園が一面に広がり、遠くに山が見えるのだ。

車両内には俺と妹以外の乗客は見えない。もうすぐ午前十時を回る時間帯だ。電車の利用者は少ない。

窓から差し込むやわらかな朝日影が暖かく心地よかつた。

「変わらないね」

来週十四歳になる妹、咲は窓の外に向けた視線をそのままに、静かにそう言った。

「着くまでしばらくこんな風景だぞ」

「違うよ、八年前と変わらないな、つて」

「ああ……そつちか。八年前、懐かしいな」

俺たちは八年前まで群馬に住んでいた。それから、東京に引っ越ししたのだ。それつきり、故郷には訪れていない。訪れることが出来なかつた。

「お前、覚えてるのか？ 五歳の頃のことだろ」

「うん。なんとなく」

咲は嬉しそうに微笑んだ。こんな表情は久しぶりに見た気がした。俺が連れ出すまで、咲はずつと、毎日悲しげにしていたから。

「ねえ、あとどれくらいで着くかな？」

「……うーん。一時間くらいかな。特急使えないしなあ」

「あたしはこれで良いと思うな。のんびり、緑を見ながら、昔を想い出すの」

そうか。

咲にとつては、これで良いのかもしない。今までずっと、少しずつ削り失われ、これから完全に失つてしまつ思い出の中の、大切な記憶を呼び起こしているのだから。

「お兄ちゃんは、悪人になつちゃうのかな？」

咲は悲しげに笑いながら、俺を見た。

「咲は俺を恨むか？」

「恨まない。恨むわけないよ。あたしをここまで連れててくれたんだよ？」

「そつか。だつたら、俺は悪人じやないよ。罪人かもしないけど、悪人じやない。お前がそう言つてくれるなら……」

涙が頬を伝うのが分かる。泣かないと決めたのに、堪えきれない寂寥せきりょうが、俺に涙を流させる。咲は俺の涙に気づいているだろう。…

…だけれど、何も言わない。言わないでくれる。

俺は、妹を殺すのだ。

地震が起きてから八日が経つが、それよりもつと、ずっと前のことだ。妹が死を宣告されたのは。

咲はずつと病気がちだった。小さな頃から。八年前、もしかしたらそれより前から。

東京に引っ越したのも、治療のためだつたのかもしない。免疫不全系の重い病気。入退院を繰り返して、年々入院生活の方が長くなつていぐ。

そして先日、遂に咲は決定的な病状の悪化をみせた。本当は外を出歩いていい状態じやない。治療をしてもひと月、数日間でも治療を怠ればすぐにでも、妹は死ぬ。

それを誰よりも知つていて、俺は妹を病院から連れ出したのだ。

地震の影響で混乱した病院と医療スタッフと普段なら厳しい警備の、僅かな隙を狙つて、俺は妹を連れてあの白い鳥籠とりかごを抜け出した。残された時間を急激に縮めても、俺は咲に幼い時を暮らした田舎を見せてあげたかった。

地震の影響は俺たちの愚行を後押ししたのかもしれない。けれど、俺と咲にとつては愚行などではないのだ。決死の覚悟で、最期の幸福を望んだのだ。

「あたしね、最高の誕生日プレゼントを貰つたよ。叶わないつて諦めてた願いを、お兄ちゃんが叶えてくれたから」

「俺はお前に何もしてやれなかつた。今だつて……いや、今はしてやれることがやつとできたのかな」

寸前で、俺は語尾を濁した。本当は不安でしようがない。……今だつて、これが本当に正しいことなかつて……いや、正しくないのは解つてゐる。正しいか間違つてゐるかではなく、これが本当に妹の、咲の幸福だつたのか。それが、分からぬ。

咲は寿命を限界まで縮めることになつた病状の悪化から、一時的に回復した状態だ。次に咲が意識を失つたら、その後はもう目を覚まさないだろう。それを担当医から聞いた咲は、命が消える前にもう一度故郷が見たいと願つた。当然、医師も両親もそれを許さなかつた。たとえもうすぐ消える命でも、最後の最後まで、延命したいといつうのが彼らの意志だつた。

でも、彼らは知らない。咲が叶わない願いを夢見て、毎晩泣いていたのを。

「ねえお兄ちゃん、ひとつ、訊いていい？」

「ああ」

「あたしが故郷を見たいつて言つたとき、お兄ちゃんはあたしを連れ出しつて決めてたの？」

「……それは」

それは、違つた。俺だつて妹が死ぬという現実を受け入れられなかつた。できる限り長く俺の傍そばに居て欲しかつた。

「最初は、そんなこと出来ないつて思つた。でも、だんだんお前の望みを叶えてあげたつて思いが強くなつて、そんなときには、あの混乱が起きた。……俺は間違つてたのかな」

「間違つてるよ。もうすぐ死んじゃう小鳥をもう一度空を飛ばせて

あげるために鳥籠から逃がして……逃げ、消えてしまつのに、叱られるようなことをしちゃうなんて……」

「それでも、俺は咲の正義でいたかった。他の誰かに悪だと非難されても、歪んだ正義だとしても」

「俺にとつて本物の存在は、唯一お前だけなのだから。

「あたし、誕生日まで元気でいられたらしいな」

「キツいか?」

「ううん、まだ平気」

今咲は、信じられないくらいに元気だ。もうすぐ消える命の火が、最期の輝きを見せてくれている。

窓の外では、見覚えがある風景が左から右へ流れしていく。遂に、俺たちは旅の目的地に着こうとしていた。

「お兄ちゃん」

「ん?」

「お願いがある」

咲は真剣な表情をこちらに向ける。

「何?」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんでいてね。これからどんなに非難されてもあたしを最高に喜ばせてくれた、大好きなお兄ちゃんでいてね。この懐かしい風景みたく、いつまでも変わらずに。どんなに周りが変わつても、お兄ちゃんの人生はお兄ちゃんだけのものだから」

「……ああ。約束する。俺は元気に俺の人生を生きる」

咲はそれを聞いて黙つて涙を流した。つられて俺まで泣いてしまつた。

俺は、俺のしたことが咲の本物の幸福に繋がると信じていた。それが真実かは俺が決められることではない。だけれど、咲の命の火をもつて、俺はこれからも歩き続ける。

たつた一つの命を繋いで。

（後書き）

拙作を最後まで読んでいただき、感謝します！

前書きにも書かせていただきましたが、この掌編は the p.i 110ws の『ONE LIFE』を参考にしています（著作権に関するガイドラインは順守していますが）。「ONE LIFE」を聴いていただけだと、より解りやすい話かなと思います。僕の実力不足もあり、伝えたいことが十分には伝わっていないかと思うので…

何が正義で、何が悪か、それは簡単には決められないことであり、決めていいものでもないと思います。偽物の幸福のための善か、本物の幸福のための悪か。本当の意味の「正しさ」とは何なのか。

常識やルールは、自由を守る為のものかもしませんが、「正しさ」を縛る鎖なのがもしません。

それが「本物」か知ることはできないけれど、信じて選ぶしかないのが人間なのかもしませんね。

陳腐な内容だったかもしれません、何かご感想を頂けたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0451s/>

ONE LIFE

2011年8月8日03時39分発行